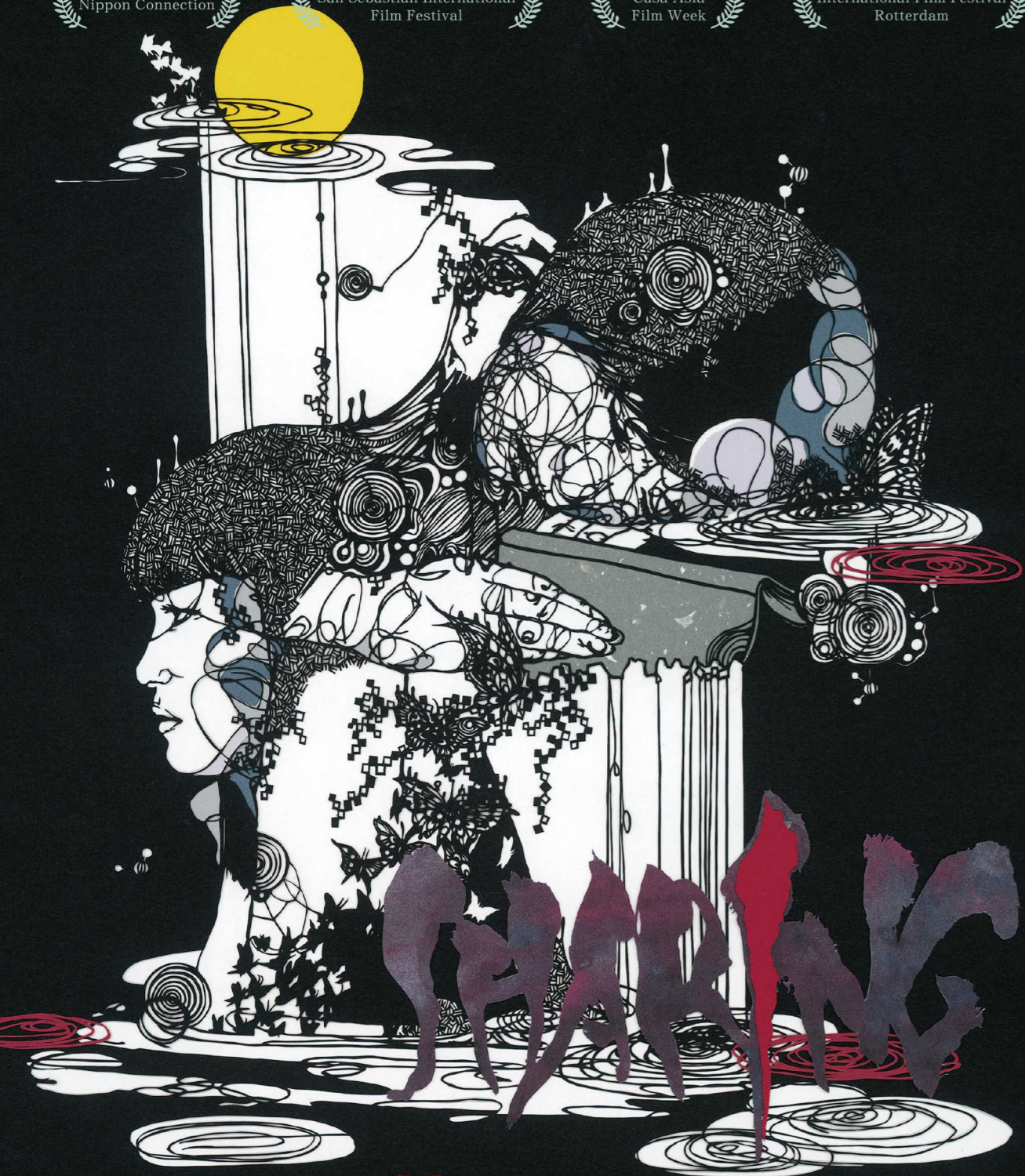


2014 Canada Vancouver International Film Festival
 2014 Korea Pusan International Film Festival
 2014 Japan Tokyo FILMeX
 2015 Iran Fajr International Film Festival
 2015 Japan Fukui Film Festival
 2015 Germany Nippon Connection
 2015 Spain San Sebastian International Film Festival
 2015 Spain Casa Asia Film Week
 2016 Holland International Film Festival Rotterdam



A SHINOZAKI MAKOTO FILM
SHARING

COMTEG presents in association with OFFICE KITANO
 Starring YAMADA Kinuo HINOI Asuka KAWAMURA Tatsuya KIMURA Tomoki
 Also starring KOBAYASHI Yuto KIGUCHI Kenta SUZUKI Kazuki SHIMIZU Hezuki MISAKA Chieko
 MATSUSHITA Hitomi YAZAKI Hatsune NONAKA Hisano NONAKA Yoshino With SUZUKI Takuji HYODOH Kumi
 Introducing TAKAHASHI Ryudai YOSHIOKA Sara TAKAHASHI Rui NIITSU Chise
 Producer ICHIIYAMA Shozo Screenplay SAKAI Zenzo Music NAGASHIMA Hiroyuki Cinematographer AKIYAMA Yuki
 Sound DODO Yasuyuki & HIRAI Shogo Editor IZUMI Yoko Special effects director TAGUCHI Kiyotaka
 Prop&Decorations MIYAZAKI Keisuke Lighting for the play MATSUO Hajime
 Make-up artist OUROUCHI Tomomi Costume NAKAJIMA Miki Casting HIGASHIHARA Nana
 Written & Directed by SHINOZAKI Makoto

<http://sharing311.jimbo.com/>
 twitter @sharing0401

This film was supported by MEXT-Supported Program for the Strategic Research Foundation at Private Universities, 2011-2015.
 ©SHINOZAKI Makoto / COMTEG
 paper-cut art SAKURAI Sayuri

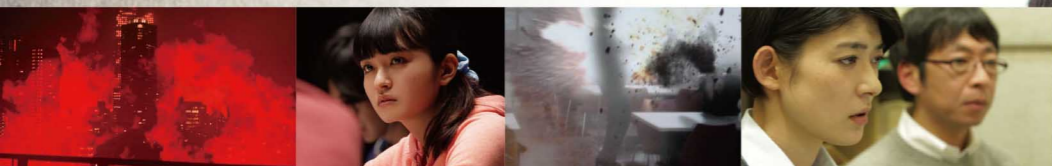
私たちが、いま、映画で描きうる真実を…。

2011年3月11日。

地震と津波による大災害は、原子力発電所の爆発をも引き起こし、日本人の心に大きな爪痕を残した。あれから5年。放射性物質の漏れは依然として終息の兆しを見せておらず、私たちの生活は、あの時の不安を拭えないまま続いている。本作『SHARING』（共有の意）は、そうした震災後の日本人の心の問題に、映画的な想像力を駆使して、真正面から向き合おうとしたフィクションである。

なお、この映画には、登場人物の一部、展開も大きく異なる2つのヴァージョン（99分版と111分版）が存在している。どちらが一方がディレクターズカットではなく、劇中で語られる分身（ドッペルゲンガー）のように、この2つのヴァージョンがお互いを照らし、未来に対する希望と怖れを炙り出していく。

（*今回立教で上映されるのは99分のショート・ヴァージョンのみ）



本当に傑作だった。迷宮のような建築物、ぞくぞくと登場する人間たち。そして現世を超えた物語、その圧倒的なスケールの大きさに身震いした、大胆で繊細で、充分スクリーンで、ラストは感動的で。堂々たる社会派ダークファンタジーの登場だ！

黒沢 清（映画監督）

311後の世界を生きる私たちの不安や困惑を、これほど鮮烈に、重層的に、そして映画的に描いた作品があったでしょうか。特にロングバージョンには戦慄させられました。実に怖い映画です。

想田和弘（映画作家）

人間の顔を凝視する執拗な持続と、世界の表情の変化をすかさず無造作に切りとるようなカメラワークとが、異様なテンションで絡み合う傑作です。本作には2つのヴァージョンがありますが、ほぼ同じ物語を語りながら、印象がこれほど異なっているのは、作者・篠崎誠の内心が、その両極の間で深く引き裂かれているからでしょう。

中条省平（映画評論家）

フィクションであれノンフィクションであれ、東日本大震災を扱ったすぐれた作品は数多く存在するが、このような例を他に知らない。しかし、考えてみれば、あの震災後の混沌を感傷に溺れることなく構造的に捉えようとするなら、ホラーという形式はまさに「コンブス」の卵ではなかったか。私たちが生きるのは「震災後の世界」ではない。私たちは震災と震災との間、すなわち「災間」を生きる。原発事故によって“確率化”された生を生きる。その意味で本作は、災間の時間に刻印された、消えることのない映像の記念碑である。

斎藤 環（精神科医）

傑作であることに間違いはないです。予知夢、分身、更には神。登場人物それぞれの現実と夢と回想が、次から次へと容赦なく視界に入り込んできます。学園という絶好の場所を武器に。我々はただ見ているしか、なす術がありません。それで良いのだと思います。まさしく、映画がここにあります。早く一般公開されることを期待します。必見です。

匿名希望（広告代理店勤務）

震災後、私たちが体験しているこの世界とは…。

社会心理学者の瑛子（山田キヌヲ）は、東日本大震災の予知夢を見た人を調査している。誰にも打ち明けていなかったが、彼女は震災で死んだ恋人の夢をずっと見続けていた。一方、同じ大学の演劇学科に通う薫（樋井明日香）は、卒業公演の稽古に追われている。ある時、311をテーマにしたその公演を巡って、仲間たちと決定的に衝突してしまう。薫もまた、この芝居を初めてから同じ夢にうなされていたのだが…。

とにかく驚嘆のひとつ言につきます。圧巻でした。間違いなくここ数年観た日本映画の中でベスト3に入る大傑作だと思います。映画の新しい地平を見せられた気がします。背筋が伸びました。10代の頃、どんな映画を観ても面白く感じ、いちいち鳥肌たててスゲーとか思ってた感覚を久々に味わいました。

緒方 明（映画監督）

3.11を、離れた場所に居る者も、当事者のように、考えていいのか、受け入れることができるのか、という、ずっと胸の内でチクチク痛んできた疑問符を、共に考える映画でもあった。

大嶺洋子（編集者）

観ている間次々に僕自身の経験や忘れていた記憶が沢山反芻されてきて、どこまでが劇中の事でどこまでが自分の思考だったのかが分からないという初めての体験をしました。ぜひまた観てよく考えたいです！

飯塚貴士（人形映画監督）

篠崎誠監督最新作『SHARING』は前作『あれから』に続き震災にまつわる作品だが今回は震災後のヒトの心にフォーカスし映画的にも「仕掛けて」いた。もはや世界がホラー化したのが故に敢えて観る者を動揺、困惑、怒りさえさせるかも知れぬ。本来映画は揺さぶりをかけるメディアでもあるのだ、と。

川瀬陽太（俳優）